

# 平成 17 年度全国商業教育研究大会北信越ブロック指定発表 「ビジネス基礎」外国人とのコミュニケーション分野における 英語教材 (DVD) の作成と本校の取り組みについて

石川県立金沢商業高等学校教諭 清水 正史  
教諭 田畑 龍一郎  
実習助手 林 道雄 (現小松商業高等学校)

## 1. はじめに

平成 15 年度より、基礎的な原則履修科目『ビジネス基礎』が導入されたが、改定前の従来の基礎的科目群の中には無かった新しい内容の代表格が、「外国人とのコミュニケーション」分野である。

この分野については、平成 15 年度に初めて『ビジネス基礎』を指導した際に、内容はさほど難しいものではないにしろ、英語を教えたことのない商業科教員として生徒に対して、どのように向き合って、どのように指導し、どのように評価するか大変苦慮した経緯がある。

そのような初年度の反省を生かし、平成 16 年度は、この「外国人とのコミュニケーション」の分野を、商業科教員の誰もが、英語の得手不得手にかかわらず、単独で自信を持って指導できるようにならないものかと考え、今回の研究テーマとして設定し、教員のスキルアップを実現させることを目標として取り組んだ。

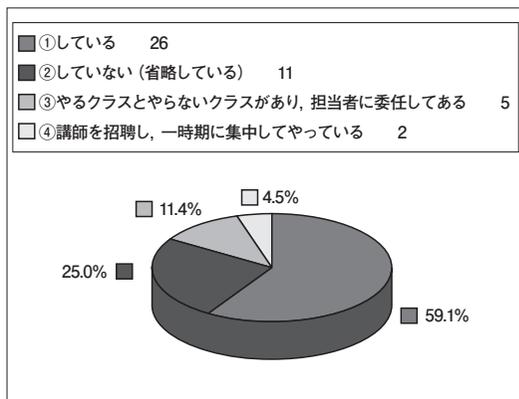
## 2. 「外国人とのコミュニケーション」分野の北信越地区アンケート調査

「外国人とのコミュニケーション」分野を研究するにあたり、『ビジネス基礎』を開講している高校では、この分野の授業をどのように展開しているのか、また、問題点があるならばどのようなことか、問題点を共有する目的で北信越地区の学校を対象にアンケート調査を実施した。

平成 16 年 9 月 8 日から 10 月 31 日まで受け付けを行い、『ビジネス基礎』を実施している対象校のうち 44 校から回答があった。

### I 調査内容

質問 1：貴校では「外国人とのコミュニケーション」の分野を授業で実施していますか？

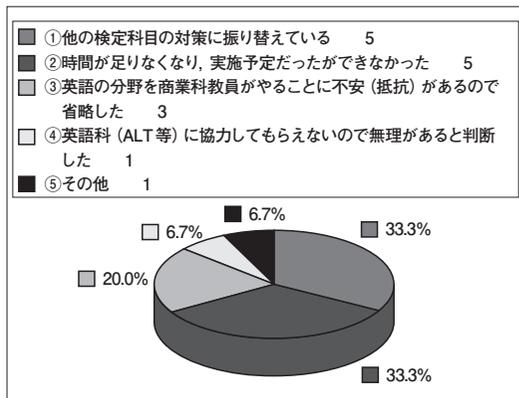


(考察) 英語の分野をしていない学校が 25% もあり驚いた。

(途中略)

質問 3：前問 1 で“していない”とお答えになった方にお伺いします。理由はなんですか？

(複数回答可)



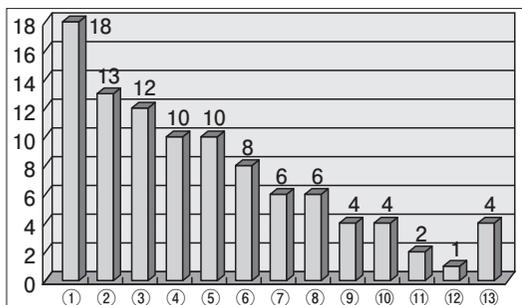
(考察) 外国人とのコミュニケーションの分野を実施していない学校のうち、自発的不実施が 6 割を占め、非自発的不実施が 4 割であった。自発的不実施のうち、英語に対し何らかの抵抗感や不安などから不実施にしている学校は 25% あった。

(途中略)

質問6：「外国人とのコミュニケーション」分野で、今使用している教科書のこの部分の記述をどう思いますか？（複数回答可）

有効回答数 42

- ①もっと様々なビジネスの場面の具体例が欲しい。
- ②教材が少ない。
- ③適切な内容である。
- ④英語より商業に関する一般常識的な知識の量を増やすべき。
- ⑤英語ビジネスをマニュアル化して欲しい。
- ⑥教えるにくい。
- ⑦中学のやっていることを高校で再びやることに疑問を感じる。
- ⑧商業科の教員が教えるには難しい。
- ⑨英語の分野は選択科目等で補った方がよい。
- ⑩細かな文法上の解説が少ない。
- ⑪体系化されていないと思う。
- ⑫文法上の誤りが多いと思う。
- ⑬その他



(その他)

- ・外国人とのコミュニケーションの前に、日本人とのコミュニケーションが大切である。そのためのビジネスマナーを学ばせたい。
- ・英語科目と内容が類似しているのので、こちらで内容を膨らませるのが大変。
- ・もともと英語のコミュニケーションは大切だという意識付けを目的としており、ここだけでコミュニケーション能力を付けるのは無理。等

(考察) 適切であると答えた方は約3割に留まり、何らかの問題点や抵抗感を示した方が全体の7割を超えていた。

## II 総括

このようなアンケート調査から、「外国人とのコ

ミュニケーション」分野については、万全の体制で授業展開しているところは少なく、むしろ大方の学校が何らかの工夫や試行錯誤をしながら実施していることがわかった。

『ビジネス基礎』の中でのこの分野は、ビジネスの国際化に対応した国際経済分野への興味・関心を喚起し、国際交流能力を意識させる第一歩としての位置付けがある。したがって、内容は簡単でも、生徒に広く、国際的な視野を持たせるねらいがあり、商業科の教員による英語の授業は、生徒にとってはこれまでの商業高校には無かったきめ細かいサービスであると言える。

しかし、教科書の内容は簡単とはいえ、中学の英語や他の英語科目との内容の重複も懸念され、担当者はこのあたりも注意が必要である。例えば、ファーストフード店での英会話などは中学校やオーラルコミュニケーションなどでも場面として設定していることが多く、重複してやったなら、生徒から「中学でもやった」「オーラルでもやった」などと指摘され、商業科目は他に学ぶことが無いのかとの疑問を抱かれかねない。

確かにこの『ビジネス基礎』はガイダンス的な目標も含んだ科目ではあるが、他の科目との内容の重複をできるだけ避け、いかに商業高校としての英語教育の第一歩にするかが今後の課題になってくると思われる。

このようなことから、商業高校としての商業英語教材が必要であると考えた。その制作にあたった本校の取り組みを以下に紹介する。

## 3. 英会話 DVD の制作

新学習指導要領により平成15年度からスタートした『ビジネス基礎』の「外国人とのコミュニケーション」分野の授業において、教材としてデジタルビデオを活用しよう、という試みは、その年の秋から始まっていた。生徒の授業に対する動機付けとして、商業科教員、ALT、実習助手の3名が、JR金沢駅近くの交差点、和倉温泉「加賀屋」、小松市「小松製作所」等でロケを行ない、台詞の字幕を入れてビデオ教材の形に仕上げ、実際に授業に使用した。生徒にとっては、現実味に欠ける教科書の上での英語の会話が、実際にビジュアルとして展開されることになる。

また、自分たちの身近な街で、身近な人物によっ

て会話が交わされていることで、そのシーンに興味関心を持つことができ、授業の導入部分として、十分に効果があったと感じた。

そのような取り組みを重ねてきたなかで、ALTと打ち合わせなどを行っているうちに、『ビジネス基礎』の教科書に書かれている台詞が、時として適切でない場合もあるということも見えて来た。日本の文化に忠実に記述したことからののか、原因は知る由も無いが、ALT から見て意味不明な点を指摘されたのである。

これらのことから、自分たちが納得できる教材作りの必要性や、教員が取り組んできた教材作りの経験を生徒たちにもさせてはどうかという発想が生まれた。

そこで、平成16年度の3年生課題研究の授業において、「ビジネス英会話DVDの制作」という講座を設定したところ、7名の生徒が取り組むことになった。この中には演劇部所属の者がおり、メインキャストとして大いに活躍してくれた。また、他の生徒も、この課題に積極的に取り組んでくれた。

一年間を通して生徒が行った取り組みは、時期が前後する部分も多くあるが、以下の通りである。

## I シーンを考える

まず、生徒にシーンとストーリーを考えさせた。商業科の『ビジネス基礎』のための商業英語教材という目的から、日常的なビジネスマナーが使われているシーンを意識させながら案を出させたが、最終的に、以下のようなシーンが考え出された。

- ① Casual Greetings —— あいさつ
- ② Business Greetings —— 名刺交換
- ③ Secretary —— 電話応対
- ④ Sales (Japanese sweets) —— 和菓子販売
- ⑤ Guide (The sights of Kanazawa) —— 道案内
- ⑥ Reception (check in) —— 受付
- ⑦ Speech (in party) —— スピーチ
- ⑧ Making (NG)

## II 台本を作成する

Iで考え出された各シーンの具体的なストーリーと台本を、ALTや英語科の教員にも協力していたが、微妙な言い回しによる意味の違いに気を付け、英和、和英の辞書などを駆使しながら作成させた。ストーリーに具体的な台詞を付けてゆくのは大変な

作業で、例えば、Salesのシーンでは和菓子を薦める設定にしたのだが、どら焼きのあんこをどのように説明したらよいのかなど頭を悩ませる場面が多くあった。

## III リハーサル・本番

台本が完成すると、校内でリハーサルを行った後、できるだけ臨場感を演出するために校外ロケを敢行した。ロケをした場所は下記のとおりである。

- ・Salesのシーンは石川県観光物産館。出演者が本校卒業生から接客指導を受ける、という一幕もあった。
- ・Receptionのシーンは金沢ニューグランドホテル。
- ・Guideのシーンは兼六園近くの遊歩道。

どのシーンも、何度もカメラワークを変えて撮影し、NGも多くあって、かなりの時間とテープを要した。しかし、生徒にとっては、最も緊張し、また、最も楽しい時間であったようである。

## IV ビデオ編集

撮影が終わったDVテープの映像は、生徒に順次パソコンにキャプチャさせ、デジタルファイル化させた。さらにその中から必要なカットを取り出し、ストーリーに合うよう時系列に並べさせた。この作品は芸術でもエンターテイメントでもなく英会話の教材であるので、生徒には必要以上のエフェクトはかけないことを心がけるように指導した。編集するためのソフトウェアは、Adobe Premiereを使用し、適宜、生徒に操作法やコツを指導し、作業をさせた。

台詞の字幕を出演者が話している速度に合わせ、見る者が読みやすい文字の大きさで、一度に読み終えることの出来るセンテンスの長さで画面に表示させてゆく、という作業が生徒にとっては難しかったようである。

後日、生徒が勝手にNG集を作っていることを知ったが、なかなか楽しくよく出来ているために、これも使うことにした。一通りの基本的な操作法しか指導しなかったのだが、生徒自らがソフトウェアを研究し、愉快的なNG集を作り上げたことで、「生徒は、明確な目的があれば自ら楽しんでソフトウェアの操作法を習得する」ということを改めて感じた。

## V テキストブックの作成

IVのビデオ編集作業と平行して、教材としてメデ

シアに付属するテキストブック作りを行った。ビデオのシーンの構成に合わせながら、IIで作成した台本を元に、各シーンの台本を、綴りをチェックしながらワープロソフトで入力し、適宜、解説などを加えていった。

## VI 仕上げ

完成したシーンごとのビデオはMPEG2に変換し、DVDコンテンツ作成ソフトを使ってCD-Rに書き込んだ。当初の予定では、最後にDVDメディアに書き込む予定であったが、全コンテンツのサイズが約600MBであったこと、DVDメディアは規格が多くプレーヤーよっての制約が多いため、出来るだけ多くのパソコンで手軽に使ってもらいたいこと、出来るなら制作費を安価にしたいことなどから、CD-Rメディアに書き込むことにした。つまり、このビデオ教材はメディアがCD-Rであるため、CD-Rが再生出来るパソコンであれば、DVD再生ソフトウェアを使って利用することが可能である。

CD-RのラベルやCDケースのジャケットも、グラフィックソフトを使い生徒にデザインさせた。最後は、CD-Rに書き込む者、CD-Rラベルやジャケットを印刷する者、など生徒を手分けして作業を行った。

### 〈感想〉

今回のDVD制作は、見る生徒にとって、身近な風景に身近な者が出演しているということで、興味関心を引く教材を作る、というねらい通りのものができたのではないかと思った。

また、ALTから指摘のあった教科書等の微妙な言い回しや文化の違いは、基本的にALTの意見を最大限尊重した。そして、情報デザイン教育やICT教育の上でも、効果があったというおまけまで付いて来た。

さらに、商業科の教員、英語科の教員、ALT、情報処理の助手と、それぞれに得意分野を持つ教員が教科や分野を越えた連携を取ることで、このような教材を作ったことも貴重な経験であった。

## 4. 教員の研修と授業への反映

### I 教員の研修

#### (1) 校内のビジネス英会話教室

平成15年から、本校にはイギリス出身の商業教

育に協力的な女性ALTが在職し、商業科目におけるビジネス英語の重要性を説いていた。彼女は本校の生徒のために、自分の英語の授業があるにもかかわらず「外国人とのコミュニケーション」分野の授業にアドバイザーとして参加してくれた。他校ではALTとの連携の難しさ（勤務時間・持ち時間・時間外手当の問題等）を指摘する声をよく耳にするが、そういうことを考えると、本校では『ビジネス基礎』をスタートする上で、理解あるALTに恵まれたと言える。

このようにして、初年度はなんとかALTの協力を得てこの分野を指導することができたが、このALTが平成16年の7月で任期が終了し、母国のイギリスに帰国する予定だったため、2年目は商業科教員だけでこの分野を指導しなければならない状況となった。

そこで商業科教員の英会話の指導力向上を目的として、平成16年4月から週一回月曜日の放課後に「ビジネス英会話教室」をALT指導のもと実施することになった。7人の教科担当者全員が参加し、会話中心のわかりやすい指導を受けた。内容は以下のとおりである。

- ①挨拶
- ②自己紹介
- ③電話応対
- ④会社の受付
- ⑤道案内
- ⑥観光地の案内
- ⑦レストランでの注文
- ⑧ファーストフード店での注文
- ⑨買い物
- ⑩販売

また、全員がALTと打ち解けて勉強できるようにと、月一回の食事会も実施し、楽しい雰囲気の中で全員がALTとコミュニケーションを図った。リラックスした雰囲気での学習ができるようになると上達も早くなり、17年2月には参加者全員が研究授業を実施できるレベルにまで向上した。

#### (2) 県商研のビジネス英会話教室

本校は県商研流通ビジネス国際経済部会を担当しており、その立場から県レベルでの研修会を主催した。

- |      |                  |
|------|------------------|
| ①講座名 | 観光業におけるビジネス英会話教室 |
| ②日 時 | 平成16年12月1日       |

- ③場 所 和倉温泉「加賀屋」
- ④講 師 フロント主任（米ヒルトンホテル勤務経験有り）
- ⑤参加者 石川県内商業科教員約 20 名
- ⑥内 容
  - ・フロントでの対応
  - ・客室案内での対応
  - ・大浴場やお土産屋への誘導
  - ・食事の説明
  - ・景色や観光案内
  - ・海外ホテル事情

ビジネス英会話を、それが実際に使われている場所で指導を受けたことにより、研修の効果が上がったという声を参加者から多く聞いた。また、観光業におけるビジネスマナーや従業員としての心得等の研修も受けることができ、大変参考になった。

## II 授業への反映

### — DVD を使用した授業展開の感想—

- ①ビジネスマナーやビジネスシーンの説明も授業に加えることで授業の内容に幅を持たせることができた。
- ②DVD 映像はビジネス英会話だけでなく、ビジネスシーンもリアルに映し出され、会社の雰囲気や社員の真剣な様子も学習することができたので、商業科ならではの英語教育ができたと思われる。
- ③ALT 教師が不在でも、商業科教員単独での授業が可能になった。
- ④身近な人物や生徒、場所等が設定シーンとなっているため興味関心を持って授業に参加していた。



## 5. まとめ

以上のように本校では、生徒や ALT、商業科教員が一体となって、この「外国人とのコミュニケーション」分野に取り組んできた。この一年間で授業内容や指導力は飛躍的に向上したように思われる。

今回の研究や取り組みは、商業の幅広い分野の中の一部の研究でしかないが、この取り組みによって得たものは多い。

まず、商業科教員が一丸となって、一つの分野の研究に取り組めたことは、初めての経験であった。一人の英語の得意な方が単独で走っても、持続せず、逆に敬遠されたであろう。

次に、課題研究として、一つの作品を作れたことは大きな財産を残したことになった。

また、本校では平成 18 年度から中国上海方面への修学旅行が決定しており、現在中国語会話 DVD を制作中である。11 月で撮影は終了し、現在編集中であるが、校内課題研究発表会において中間発表をさせていただいたところ、まずまずの御好評を得たようである。

今後ますます加速する国際化の波に乗り遅れることのないようにしていきたい。

（文責 清水 正史）

2006 年 2 月 15 日 印刷  
2006 年 2 月 20 日 発行  
定価 210 円  
(本体 200 円)

© 編集・発行

**実教出版株式会社**

代表者 島根 正幸

発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町 5

TEL. 03-3238-7777

<http://www.jikkyo.co.jp/>